

武蔵野市平和施策のあり方懇談会

報 告 書

(R51226素案)

令和6年1月

目 次

はじめに	1
1 「平和」の概念の整理について	2
(1) 「狭義の平和」と「広義の平和」	2
(2) 本懇談会における「平和」の捉え方	2
2 武蔵野市における平和施策の現状と課題について	4
(1) これまでの平和施策	4
(2) 武蔵野市の現状と課題	5
(3) 平和施策のあり方について考えるための視点	5
3 今後の武蔵野市の取り組みについて	7
(1) 武蔵野市の戦争に関するもの	7
(2) 多文化共生・国際理解に関するもの	7
(3) 両者に関するもの	7

関係資料

- 資料1 武蔵野市平和施策のあり方懇談会設置要綱
- 資料2 武蔵野市平和施策のあり方懇談会委員名簿
- 資料3 武蔵野市平和施策のあり方懇談会 審議経過
- 資料4 令和4年度武蔵野市民意識調査（抜粋版）
- 資料5 中高生世代に対する平和についてのアンケート

はじめに

「平和施策のあり方懇談会」では、令和5年8月より5回の審議を行い、今後の武蔵野市の平和施策のあり方について検討を行った。これまでの武蔵野市の平和に関する取組みの経緯を確認し、平和をどのようにとらえるのかを検討したうえで、今後期待される施策・事業のあり方を議論した。

ここにその結果をまとめ、報告する。

※追記予定

1 「平和」の概念の整理について

(1) 「狭義の平和」と「広義の平和」

武蔵野市第六期長期計画では、「平和な社会とは、戦争がないだけでなく、互いに人として尊重されることによって実現され、心豊かで穏やかな市民生活をもたらすものである。」と記載している。

「平和」という概念をどう定義づけるかということは難しく、簡単に分けると、「狭義の平和」と「広義の平和」という考え方がある。もともと、平和は戦争のない状態と考えることが一般的であるが、戦争がなければ本当に平和と言えるのかと問いを立てたときに、そうではないだろうということで概念が広がっていく。

平和学の有名な学者であるヨハン・ガルトゥングは、平和という概念は、戦争ではなく、暴力のない状態と定義し直している。暴力をいわゆる目に見える暴力、直接的暴力と考えれば、戦争のない状態は平和であり、治安が安定している状態は平和だということになる。これに対して、構造的暴力という概念をガルトゥングは提唱した。目には見えないけれども、不当な力によって自由を奪われるような状態、例えば、貧困、差別、飢餓、病気、こういったものが構造的暴力であるとしている。

こう考えると、戦争はなくても貧困に打ちひしがれている状態、あるいは差別をされている状態は平和ではないとなり、さらには健康が害されている状態も平和ではないというように、どんどん概念は広がっていくこととなる。

(2) 本懇談会における「平和」の捉え方

概念が広がっていくことは、平和の問題を広く豊かに考えるという面では積極的な意味がある一方で、あらゆるものが平和の対象になり、收拾がつかなくなるという問題もある。例えば、非常に広い意味で平和をとらえると、福祉施策も平和の話となるため、市の行政は全部平和施策となってしまう。

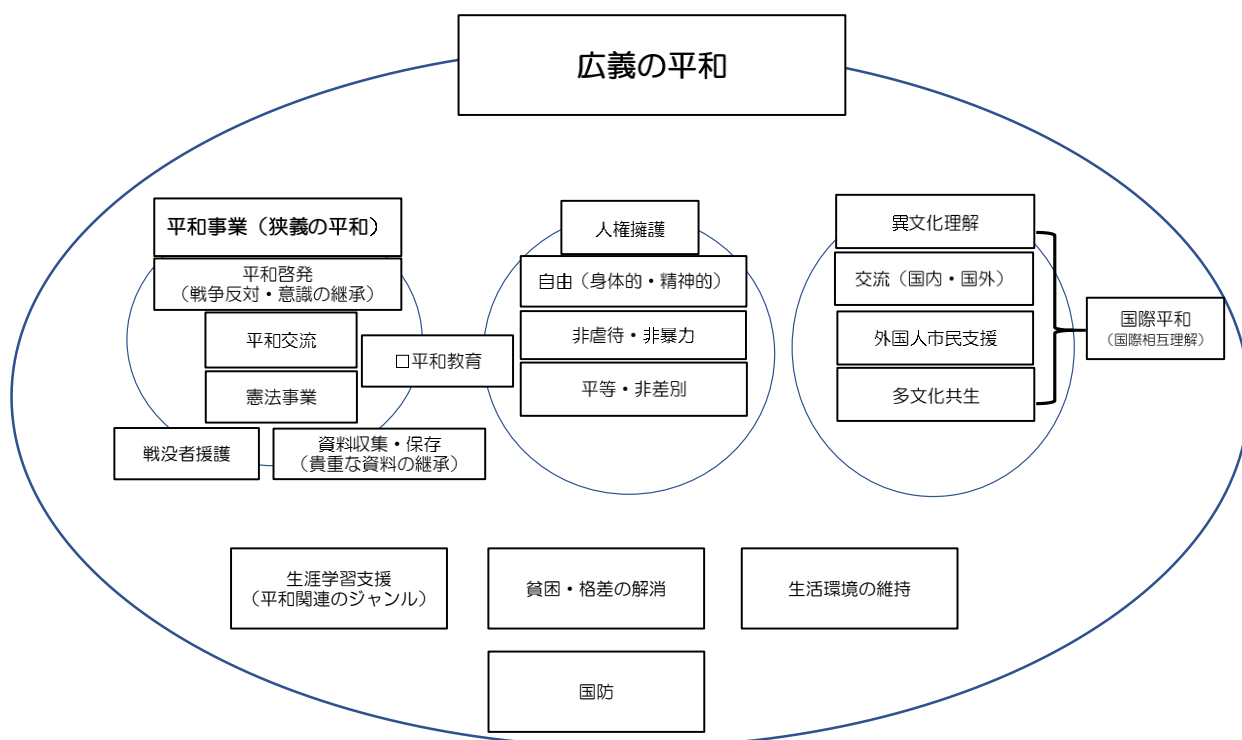
そのため、本懇談会では、今後の武蔵野市の平和施策のあり方について考えるにあたり、平和という意味を一定限定して捉えることとした。具体的には、戦争のない「狭義の平和」に加えて、多文化共生・国際理解を含めて考えることとする（図1参照）。

言うまでもなく、戦争の問題と多文化共生や国際理解は密接に関わっている。有名なユネスコ（国際連合教育科学文化機関）憲章の前文には「戦争は人の心の中で生まれるもの」という記述がある。ユネスコ憲章の考えは、戦争というものは偏見や差別、他国や他文化に対する偏見から生まれてきた。だから、そういった偏見を乗り越えるような心をつくる、戦争

のない世界を教育や文化を通してつくっていくという趣旨で生まれたものである。そのため、ユネスコ憲章とともに国際理解教育（International Understanding Education）についても提唱している。

以上のことから、本懇談会で取り扱う「平和」は、戦争関連及び多文化共生・国際理解とする。

図1 平和のイメージ



令和4年度庁内検討会議作成（一部修正）

2 武蔵野市における平和施策の現状と課題について

(1) これまでの平和施策

第二次世界大戦中、現在の武蔵野中央公園周辺には、大規模な軍需工場である「中島飛行機武蔵製作所」があった。この工場は、ゼロ戦など日本の軍用機のエンジンの約3割を製造していたことから、米軍の攻撃の対象となり、昭和19年11月24日に初の空襲を受け、以降、終戦までに9回の爆撃を受けた。これらの空襲により、工場の従業員や周辺住民の方々など、約200人以上の尊い命が失われた。

このような被災の歴史から、武蔵野市では、戦争の悲惨さと平和の尊さを次世代に語り継いでいかなければいけないという強い思いを市民、市議会、市がともに持ち、これまで平和に関する取り組みを継続して行ってきた。

昭和35年に「世界連邦に関する宣言」、昭和57年には「武蔵野市非核都市宣言」を市議会が採択し、恒久平和の実現に向けた決意を表した。

昭和61年に出された、「武蔵野市平和問題懇談会」の提言書では、「世界各国の市民同士の相互理解、相互信頼を築くことが、ひいては世界平和の実現に寄与することになる」と言及され、それを受けて市民間の国際交流のあり方が検討された結果、平成元年には国際交流協会(MIA)が設立された。市民主体の国際交流及び国際協力の推進、在住外国人への支援などを積極的に行っている。

平成19年、非核都市宣言から25周年を機に、市民や平和関係市民団体、学生等で構成される「非核都市宣言25周年記念事業実行委員会」が設置され、「戦争も核もない世界を子どもたちに」というスローガンの下に、講演会、原爆と空襲に関するパネル展示、フィールドワークなどさまざまな平和事業を行った。この事業は、継続を求める市民の声もあり通年事業として継承され、翌年から「非核都市宣言平和事業実行委員会」となり、現在まで市との共催により、数多くの平和に関する事業を企画・実施している。

平成23年には、学識経験者や市民・市民団体等による「武蔵野市平和施策懇談会」により「平和の日」の制定などに関する提言があり、同年9月、市議会の全会一致で「武蔵野市平和の日条例」が可決され、初めて空襲のあった11月24日が「武蔵野市平和の日」として制定された。

平成24年からは、節目の年に長崎へ武蔵野市在住の中高生を派遣する事業である「青少年平和交流派遣事業」を実施しているほか、戦争の記録保存にも力をいれ、平成22年には、平和事業実行委員とともに、市民の戦争体験をまとめた「武蔵野から伝える戦争体験記録集」を作成し、令和5年までに計4冊を発行している。戦争体験記録集同様、より多くの方に、

戦争の実相を知っていただくため、戦争体験者のお話を動画として保存し、市のホームページでも公開するなど、戦争体験の継承に取り組んでいる。

この間、平成19年には日本非核宣言自治体協議会、翌20年には平和市長会議（現・平和首長会議）、令和5年には平和首長会議東京都多摩地域平和ネットワークに加盟するなど、他自治体との連携による活動も積極的に行っている。

（2）武蔵野市の現状と課題（懇談会設置の背景）

前述のとおり、武蔵野市では、戦争の悲惨さや平和の尊さを次世代に継承していくため、市民等による実行委員会との協働により平和啓発事業を実施しているが、以下のような課題があると考えられる。

令和5年に戦後78年を迎え、戦争体験者が高齢化していき、戦争の惨禍を語り継いでいくことが今後ますます困難となる中、戦争の悲惨さと平和の尊さを次世代へ継承していくための方法を早急に検討していく必要がある。

時間の経過とともに散逸等の恐れのある民間保有の戦争関連資料の保存等について研究することも喫緊の課題である。

また、令和4年2月から始まったロシアによるウクライナ侵攻や、令和5年に勃発したイスラエルとイスラム組織ハマスの大規模な武力紛争など、不安定な世界情勢が連日報道されている。こうした世界各地で続いている戦禍の状況は、SNSの普及などによりリアルタイムでもたらされるとともに、容易にアクセスできるようになり、市民の平和への関心、捉え方が変化してきている。物価の高騰や避難民の受け入れなど、日常生活にも影響を及ぼしており、現在の平和への関心の高さは、現在起こっている状況、リアルな戦争が契機となっている可能性が高い。

このように平和に関する状況が大きく変化してきているため、平和施策のあり方について新たな展開を検討していく必要がある。市民一人ひとりが平和意識を高め、平和を願う声を主体的に発信していけるための取り組みが求められている。

（3）平和施策のあり方について考えるための視点

今後の武蔵野市の平和施策のあり方について考えるにあたって、本懇談会では2つの柱を立てて検討することとした。

1つ目の柱は、「武蔵野市の戦争に関するもの」である。具体的には、武蔵野市の空襲体験の継承と伝承の問題が入ってくる。武蔵野空襲の様々な遺品の保管の問題や、小中学生にどのように武蔵野空襲を伝えていくか、小中学生の中でどのようにお互いが学び合っていく

か、あるいは大人の場合だと、ふるさと歴史館や様々なイベントを通して何ができるかなどといった課題が出てくる。必ずしも武蔵野空襲に限る必要はないが、いずれにしても武蔵野にかかわる戦争に関する事柄を1つ目の柱とした。

2つ目の柱は、「多文化共生、国際理解に関するもの」である。教育の世界では異文化理解という言葉も使われる。先に述べたとおり、戦争の問題と多文化共生や国際理解は密接に関わっている。これらは決して別々の事柄ではなく、両者を含めて検討し、武蔵野の平和をつくりあげることが重要であると結論づけた。

この2つの柱に対して、「子ども対象」と「大人対象」というもう一つの整理の軸を立てることとした。つまり、子ども対象となると学校が中心となり、大人対象では歴史館のような博物館やイベントが中心になってくる。学校教育と社会教育という形に言い換えることもできる。

このように分けると、以下の通り4つの象限ができる。この整理に基づき議論を深め、具体的な平和施策について、それぞれに提言を行う。

	武蔵野市の戦争に関するもの	多文化共生、国際理解に関するもの
子ども対象 (学校教育)	①	③
大人対象 (社会教育)	②	④

※追記予定

3 今後の武蔵野市の取り組みについて

(1) 武蔵野市の戦争に関するもの

- ① 武蔵野空襲の遺品・遺構の「収集・保存」「調査・研究」
- ② 武蔵野空襲の遺品・遺構の「展示・教育」
- ③ 戦争体験の「新たな伝承者」の育成・学習
- ④ フィールドワークの蓄積（イベント・書籍・資料）の活用

(2) 多文化共生・国際理解に関するもの

- ① 異文化理解・相互交流の新たな方法（武蔵野の文化（アニメなど）、デジタルの活用）
- ② 国際交流・多文化共生に関する武蔵野の先駆的試みの発展

(3) 両者に関するもの

- ① 平和・戦争を“楽しく”学ぶ試み（アート・スポーツ・イベント・交流事業、「日常」への着目）
- ② 既存の施設（歴史館・コミセン等）の活用と学社連携（生涯学習）
- ③ 世界の現状と武蔵野

※追記予定